様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：４３９２３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２６２４

研究課題名（和文）近・現代英語期における英語表現の構文化に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Constructionalization of Expressions in Modern and Present-day English

研究代表者
石崎　保明（ISHIZAKI, YASUAKI）

南山大学短期大学部・英語科・准教授

研究者番号：３０３６７８５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、特に近代英語期から現代英語に至る期間に焦点を当て、英語表現が構文(変)化していくプロセスを観察し、ことばの変化を扱う諸理論、とりわけ認知言語学に対する実証的・理論的な貢献を図ることを目的としている。研究期間中においては、現代英語でしばしば議論の対象となる自動詞・他動詞交替や所格交替の歴史的発達を考察し、通時的構文文法理論の専門書や概要の解説も行った。本研究に関連する成果を、国際学会１件の研究発表（単独）と２冊の図書（ともに共著）、および２編の学術論文（ともに単著、うち１編は書評論文）として公表した。

研究成果の概要（英文）：In the present research, I aimed at exploring the historical developments of English expressions from the Modern English period up to the Present-day English, in terms of cognitive and construction grammar perspectives.
Some of alternation phenomena in English, including intransitive-transitive alternation and locative alternation, were discussed. Fruits of work in line with this reseaech within the research duration include 1 oral presentations at an international linguistic society, two collectively written books and 2 articles (including book review articles).

研究分野：英語史

キーワード：構文文法　用法基盤モデル　交替現象　認知言語学　自動詞・他動詞交替　所格交替

１．研究開始当初の背景

人間が生まれつき、そして成長の過程で発現・発達する認知能力を基盤として言語の様々な現象を説明することを目的とする認知言語学（cognitive linguistics）、およびその流れを汲む構文文法理論（construction grammar）（以下、総称して認知言語学とよぶ）は、脳科学や心理学といった認知科学諸分野の研究成果を柔軟に取り込みながら、発展を続けている。認知言語学は、実際のコミュニケーションの現場におけることばの使用が、そこに関わる人々の様々な認知能力に作用し、それが言語能力に影響を与えるという用法基盤（usage-based）の考え方を共有しており、言語表現だけでなく、話者の視線の移動、振る舞いといった発話行為にともなう環境要因まで言語研究に取り込んでいる。このような接近法は、認知言語学では一般に用法基盤モデル（usage-based model）とよばれている。

従来の用法基盤モデルに基づく分析は、現代の話者が日常的に用いる言語現象を対象とすることが常であり、古い時代に書かれた言語資料が認知言語学の研究対象となることは少なかった。しかしながら、近年、その状況が変化しつつあり、特に北欧諸国の歴史言語学者を中心に、言語の通時的変化に対する認知言語学の適用可能性が議論されはじめており、この動きは特筆に値する。これらの研究の多くは、文法構文（言語の形式と意味のペア）の共時的な使用の実態とその使用頻度（frequency of occurrence）の変化が当時の話者の認知能力に動機づけられているという想定のもとで研究が進められてきており、最近では、構文化の事例とメカニズムに関する包括的な研究が、その明示的な成果として表れている。本研究は、この一連の研究の流れの中に位置づけることができる。

通時的言語変化を認知言語学の視点から捉える場合、歴史的な言語資料を、用法基盤モデルの理念に沿った形で取り扱うことが求められる。しかしながら、認知言語学を軸足に置きつつ歴史的言語資料を所蔵した電子コーパス（言語資料をデータ化して所蔵し、用例の検索や頻度の集計を容易に行うことができるデータベース）を扱うことのできる認知言語学者や、文献学的な知見を有する認知言語学者は、わが国においても世界においても決して多いとはいえず、その研究手法もまた、十分に定まっているとは言い難い。

他方、国内外の学会の状況に目を向けると、認知言語学に基づく通時的言語変化理論に関心を示す文献学者や辞書学者が多いとは言えない状況があり、本研究が目指す領域を開拓・進展させるためには、これらの研究領域との学術的交流が不可欠である。

２．研究の目的

本研究の目的は、初期近代英語期以降におけるいくつかの英語表現の通時的発達・変化を調査し、認知言語学の観点からその発達プロセスについて説明を試みることである。

近年、言語資料の電子化への取り組みが世界各地で精力的に進められているが、特に近代英語期（おおむね 1600 年から 1900 年あたり）の文献を所蔵した大規模データベースが整備されつつある。また、近代英語期は、英語・英文法辞書が数多く出版されるようになった時期でもある。本研究で近代英語期以降を焦点とするのは、上記の研究上の背景を踏まえてのものであり、現代英語初期に至る言語使用の実態と変遷を調査した。

言語表現としては、交替現象を起こす動詞（e.g. climb, load, spray）を取り上げた。これらの言語表現を取り上げる理由は、先行研究がもっぱら現代英語からの分析があるのみで、それらの初期近代英語期以降の発達を考察することは、言語事実の発掘の点からも、理論構築の点からも、意義があると考えられるからである。

言語理論としては、認知言語学に基づく通時的な言語変化の研究を行った。その際、これらの視点での英語史研究は、世界的にみてもまだ端緒についたところであることから、その理論的な深化を図ることもまた、本研究の重要な柱をなしている。

以上のように、本研究では、初期近代英語期以降に時代の焦点を絞り、これらの資料の特性に配慮しながら、当該時期における自動詞・他動詞交替や所格交替の通時的な使用の実態を調査し、その言語変化のプロセスを、用法基盤モデル・認知言語学の観点から説明を試みることとした。

３．研究の方法

本研究は、実証的研究と理論研究に分けることができる。

実証的研究に関して、報告者は、これまで、電子化されたデータベースや古い時代に書かれた辞書や文法書を用いて、方向を表す副詞や不変化詞、前置詞句の通時的発達を調査し、それらの発達を、文法化（名詞や動詞など、内容の豊富な要素から前置詞や冠詞のように機能的は働きをする要素へ変化する言語変化のプロセス）や語彙化（内容のある要素から、より豊かな内容を表す要素へと変化すること）を包含した用法基盤モデルに基づき、説明を試みてきた。基本的には、過去の文献を丹念に調査し、収集した用例から数量的な変化を明らかにする研究方法は、本研究においても継承した。

具体的なデータの収集方法は、以下のとおりである。言語事実の発掘に当たっては、大規模データベースや Web や市販の電子コーパスを用いて収集するが、基本動詞や前置詞など、日常的に高い頻度で使用される言語表現は、大規模な文献データベースを用いての

調査になじまないということもあり、climb などの使用状況を調査する際には、各時代における各ジャンルの文献を所蔵した適度なコーパスサイズである ARCHER（A Representative Corpus of Historical English Registers）を用いるなど、言語資料の選択に配慮した。

ところで、これまでの先行研究の成果として、文法化とともに進行する構文化については、文法化現象に強い一方向性の傾向が観察されることから、電子コーパスを用いて頻度効果の観点から生産性の高まりを調査するという研究手法がある程度定着している。それに対して、報告者のこれまでの研究から、生産性の減少を伴う語彙化については、言語変化の方向性が一定ではなく、それが使用される言語環境に影響を受けることがわかっている。本研究でもこの点に特に注意しながら、データの収集を行った。

理論研究に関しては、まず、言語資料のタイプを、そこから看取できる認知能力との関連で特徴づけた。例えば、大規模な英語文献データベースを用いることにより、ある特定の言語表現における定着度や生産性を測ることができることはもちろんのこと、当該の言語表現が使用されている文脈を丹念に調査することにより、先行文脈での使用がその後の使用に影響を与えるという「プライミング（priming）」の効果を観察することができる。また、英語・英文法の辞書を用いることについて、Oxford English Dictionary（OED）に記載されている言語表現の語源や意味の通時的変化からメタファやメトニミといった認知能力の発現を観察することができ、Historical Thesaurus of the OED（HTOED）からは当時の類義語の競合関係を観察するのに役立つ。加えて、従来は強調されることが少なかったものの、初期近代英語期以降に書かれた辞書の編者の多くは、高度な知識人であったとはいえ、当時の母語話者であり、電子コーパスや大規模データベースでも入手可能な裁判記録からは、様々な身分・立場の者が使用していた言語表現を知ることができる。このような資料を積極的に活用することにより、当時の母語話者の直観力の一端に触れることもできるとの考えのもと、当該資料を用いた。

このように、言語資料を認知言語学の観点から位置づけ、多角的に調査することより、当該表現の歴史的発達のプロセスのみならず、認知的な動機づけについても明らかにしようと試みた。

４．研究成果

本研究期間では、実証的研究と理論的研究の双方において、さらには具体的な事例研究において、いくつかの成果があったと考えている。以下、実証的研究と理論的研究の成果を簡潔に述べた後、事例研究を通して得られた成果を述べる。

まず、実証的研究についてであるが、本研究期間中に近代英語期の言語資料をデータベース化したARCHERの最新版がWebを通して利用が可能となり、このコーパスを用いて自動詞・他動詞交替を行う代表的な動詞である climb (up/down)や代表的な所格交替動詞である load や spray の使用の状況を調査した。これらの動詞の使用状況については、英国の大英図書館に出向き、1473 年から 1701 年までの英語で書かれた資料を所蔵する EEBO（Early English Books Online）や English Short Title Catalogue を用いて調査するとともに、データベースで得られた資料を必要に応じて原本で確認した。

文献学的な研究における具体的な成果の一つは、中野弘三[編]（2017）『語はなぜ多義になるのか－コンテキストの作用を考える－』において言及することができたことである。報告者は、同著の 6 章（「語義の歴史的変化とその事例」）を担当し、その中で語義の歴史的変遷を研究するために有効な言語資料（文献・電子コーパス）のいくつかを執筆当時の最新の状況を含めて紹介しており、これらは、これからの語彙の歴史的発達を調査する研究者にとって有益な情報となると考えている。

理論的な研究の成果としては、確固たる理論構築には至らなかったものの、最近出版された通時的な構文（変）化に関する本や論文を調査し、最新の理論研究の状況を知ることができた。特に、構文化や構文変化における最も詳細な研究書の１つに Brinton and Traugott (2013)*Constructionalization and Constructional Change* にという本があるが、報告者は、その本についての書評論文を執筆し、その内容が *IVY* 48 号（名古屋大学英文学会）に掲載されている。さらに、当該図書を事例研究とともにさらに詳しくかつ分かりやすく解説した内容が、前出の中野（編）（2017）に掲載されている。

事例研究における具体的な成果は、自動詞・他動詞交替の事例研究と所格交替のそれの２つに大別される。

まず、自・他交替動詞の事例研究として最も代表的な動詞である climb を取り上げ、認知言語学の観点から分析を試みた。本研究内容は、田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗（編）（2016）『文法変化と言語理論』の第１章に収録されている。

よく知られるように、現代英語の動詞 climb は、日本語の「上る・登る」とは必ずしも対応しておらず、移動の方向というよりは手足を使っての全身移動という移動の様態を表す動詞である。また、これもよく知られているように、climb には自動詞（Bill climbed up the mountain.）としての用法と、他動詞（Bill climbed Everest.）としての用法があるが、一般的には自動詞として用いられることが多いものの、Everest のような、登頂が困難な場所へ上る場合は他動詞用法

が一般的となる。つまり、自動詞と他動詞の選択に際しては、「移動の困難さ」の度合いが重要な尺度となっていると考えられる。

以上の自動詞と他動詞の選択は、認知言語学における事態認知の違いを反映している。先駆的な認知言語学者である Langacker は、1987 年の論文“Grammatical Ramifications of the Setting/Participant Distinction”*Chicago Linguistic Society* 13, 383-394）において、状況把握における実体（entity）をセッティング（setting）とその一部である場所(location)、および参与者（participant）に区別している。セッティングとは、いわゆる場面設定の役割をしている要素であり、状況把握においては一般に目立たず、背景化されている。他方、参与者は状況把握セッティング中で描かれる出来事や行為に直接に関与している様相である。一例を挙げると、In the kitchen, Seymour sliced a salami on the corner with a knife (Langacker 1987)という用例において、 in the kitchen がセッティングであり、on the corner はセッティングの一部としての場所、Seymour や salami、knife は参与者である。一般に自動詞では参与者が１つであり、他動詞は 2 つ（以上）となることから、climb における自動詞と他動詞の交替は、climb という行為が行われる対象がセッティング（ないしは場所）とみなされるか参与者とみなされるか、という事態認知の違いとして捉えることができる。

事態認知それ自体は、ヒトが持つ認知能力であるため、古い時代の英語話者と現代の英語話者との間で相違はないと想定されるが、その表現方法はその各々の時代で用いられていた語彙や文法の構造に依存する。このことを踏まえ、ARCHER を中心に採取した 80 例の動詞 climb の使用状況を調べてみたところ、初期近代英語期の自動詞用法の climb は up と共起することが多かった（19 例中 12 例）ものの、その割合は歴史を下るにつれて徐々に下がり、多様な前置詞句と共起するようになっていく。また、ARCHER を調べた範囲では、手足の無い移動主体が climb とともに用いられる例は 20 世紀に入ってからであり、その用例の大半が数値（の上昇）である。これらのことから、動詞 climb は「手足を使っての移動」が基本であり、その意味は近代英語期においては依然として強固であり、現代になって「（何かの要因にもかかわらず）実体が上方へ推移・移動する」というスキーマ的意味を獲得し、併せて、セッティング・参与者の交替による他動詞の用法が発達した可能性を指摘した。

研究期間の後半は、所格交替を含む構文の歴史的発達についての研究を行い、その成果をスウェーデンのウプサラ大学で開催された後期近代英語期に関する国際学会 (6th International Conference on Late Modern English)で口頭発表を行い、その一部を論文としてまとめ、『南山大学短期大学部紀要』第 39 号にて発表した。

所格交替とは、例えば load the wagon with hay のように、場所を表す要素（the wagon）が動詞の目的語位置を占めたり（この構文を便宜的に「場所目的語構文」と呼ぶ）、load hay onto the wagon のように物材（hay）が動詞の目的語位置を占めたりする場合（この構文を「物材目的語構文」とよぶ）がある現象である。この交替現象は、動詞によっては許されない場合があることや、交替により意味が若干変わる場合があることもあり、過去 40 年以上もの間、様々な理論的枠組みで議論されてきた。しかしながら、その議論はもっぱら、現代英語（および英語以外の一部の外国語）に対してなされたものであり、まだ解決されていない問題が残されている。さらに、先行研究においてこの交替現象の通時的な発達が議論されることは、管見の限りでは、なかった。

そのような状況を鑑み、本研究では、代表的な所格交替動詞である load と spray を取り上げ、それらの動詞含む構文の後期近代英語期以降における発達を調査した。

まず、動詞 load を含む構文の歴史的発達については、ARCHER を用いて 17 世紀から 20 世紀までの使用状況を調査し、114 例を採取した。後期近代英語期以降における load は、(a)過去分詞、(b)現在分詞、(c)定形動詞、(d)動名詞、の形式で使われており、共起関係としては、(A)with 句を伴う場合、と(B)onto などの方向を表す前置詞句を伴う場合、(C)上記(A)と(B)のどちらとも共起しない場合、(D)どちらとも共起する場合、(D)その他(方向を明示する onto ではなく on と共起する場合)があった。その分布を調べてみると、二つの興味深い事実を指摘することができる。まず、動詞 load が用いられる際の文法形式は、過去分詞が約 70%を占めていた。また、前置詞句との共起では、用例全体の約 60%が with 句と共起する例であり、方向を表す前置詞句と共起する例は 3.5%に過ぎなかった。つまり、特に後期近代英語期においては、過去分詞 load と with 句とが共起する「loaded with +「物材」」の事例が用例全体の 6 割以上を占めており、「（ある場所を主語として）物材が置かれている状態」がある程度生産性の高い構文ユニットとして定着していたことを示している。他方、現代英語として議論されている、動作主を主語として load を定形動詞として用いる所格交替構文は、後期近代英語期では少なくとも一般的ではなく、歴史的には新しい構文であることが分かった。

所格交替において、動詞 load とともに代表的な動詞である spray は、少なくとも後期近代英語期で一般的ではなく、ARCHER では 4 例のみ、後期近代英語期の英国における裁判記録をデータベース化した Old Bailey Proceedings にも用例がなかった。このため大英図書館が所蔵する 19 世紀に出版された英語資料を収録した大規模なデータベース

（British Library's Nineteenth Century Collections Online）を調べたところ、全体として用例は少なかったものの、load と同様に「（ある場所を主語として）物材が噴霧さえている状態」を描写する用例が多かった。ただ、少ない用例を見る限りでの理解とはなるが、動作主を主語として spray を定形動詞として使うケースも散見され、with 句と方向を表す前置詞句のいずれの用例もほぼ均等に、同時代（1890 年代前後）に現れていることから、spray は、その頻度や発達時期の点でも、また構文間の対称性の点においても、load とはやや異なる歴史的発達をしたと考えることができる。

最後に、今後の研究の課題としては、所格交替を示す load と spray 以外の動詞についても調査対象を広げ、所格交替に関わる動詞とそれが用いられる構文の発達を通時的構文文法理論の観点から捉えていきたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①ISHIZAKI, Yasuaki (2018) "Some Notes on the Historical Development of Constructions with the Verb *Load*," 『南山大学短期大学部紀要』終刊(39)号, 南山大学短期大学部, pp.81-94. (査読無)

〔学会発表〕（計 1 件）

①ISHIZAKI, Yasuaki (2017) 発表題目："On the Historical Development of Constructions with Locative Alternation Verb- a Diachronic Construction Grammar Perspective," 6th International Conference on Late Modern English, The University of Uppsala, Sweden.

〔図書〕（計 2 件）

① 田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗編 (2016)『文法変化と言語理論』開拓社, 東京（執筆担当：自他交替動詞 climb の通時的発達）（石崎保明） pp.1-29. 単著 ISBN:978-4-7589-2231-9

② 中野弘三編 (2017)『なぜ多義になるのか—コンテキストの作用を考える—』朝倉書店, 東京（執筆担当：第 6 章「語義の歴史的変化とその事例」）(石崎保明) pp. 130-150. ISBN: 978-4-254-51621-0

６．研究組織

(1)研究代表者

石崎保明（ISHIZAKI, Yasuaki）

南山大学短期大学部・英語科・准教授

研究者番号：３０３６７８５９